

石川県七尾美術館だより

平成27年1月1日発行
編集・発行 (公財)七尾美術財団

第80号 (冬号)



ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM



われら、能登ブランド絵師
～近世に活躍したゆかりの画家～

七尾市指定有形文化財

「山水図」

長谷川信春（等伯）筆 室町～桃山時代（16世紀）
当館蔵

展覧会紹介

平成27年1月4日(日) ～

4月12日(日)

休館日については裏表紙をご覧ください

「われら、能登ブランド絵師」

「近世に活躍したゆかりの画家」

12月19日(金)〔開催中〕～平成27年2月15日(日)

◆第1展示室

安土桃山時代から江戸時代の、いわゆる「近世期」に活躍した能登ゆかりの絵師5人に注目し、その作品あわせて10点を展示している本展覧会。その5人の顔を順に紹介しましょう。

【絵師①】長谷川等伯(1539～1610)

トップバッターはやはりこの人。能登のみならず、日本を代表する画家としてその名が轟いているといっても過言ではないでしょう。

七尾に生まれて30歳頃に京都に移り住み、京都画壇の雄・狩野派と鎬を削りつつも、やがて天下人・豊臣秀吉に認められて画壇の頂点に立った等伯。まさに秀吉ばりの「戦国サクセスストーリー」で、見事に立身を成し遂げた人物でした。

本展では等伯の若年期、「信春」の名を使用していた時に描かれた水墨画「山水図」と「陳希夷睡図」(共に当館蔵)を展示しています。

「十六羅漢図」(部分) 長谷川等伯 個人蔵



【絵師②】長谷川等誉(?～1636)

一言でいえば「謎の画家」。はっきりしているのは没年のみで、生まれも生涯も享年もわかりません。しかし、彼は10点の作品を遺しており、そこからある程度の姿を推理できます。

それは等伯と同じく絵仏師で、等伯に絵を学び桃山時代末期から江戸時代前期頃に活躍した人物であろうということ。七尾の長谷川家を継承した、等伯に極めて近い存在だった可能性が高いのです。

本展では、晩年期制作とされる「涅槃図」(当館蔵)および「十六羅漢図」(個人蔵)の仏画2点を展示しています。

「篠竹図」 池野観了 個人蔵



【絵師③】池野観了(1753～1830)

志賀町・恩敬寺の第14世住職。若い頃、京都滞在時に南画の大家・池大雅(1723～76)に師事したことが、その人生に決定的な影響を与えることとなりました。

住職としての務めを果たす一方で、大雅の様式を追求し生涯にわたって制作活動を継続、様々な作品を描き続けた観了。人びとは彼のことを「能登の大雅堂」と呼んだといわれます。

本展では、水墨画より「鴛鳥図」と「篠竹図」、彩色画より「流水図」(全て個人蔵)の、計3点を展示しています。

【絵師④】山崎雲山(1771～1837)

漁師の子として生まれたという雲山ですが、幼少時より絵師を志して独学で画技を修得。京都や諸国を遊歴して多くの文化人たちと交流し、腕に一層磨きをかけて独自の世界を築きました。

孤独を好んだ性格から「孤高の南画家」といわれる雲山。しかし現存作品は多く、出身地である羽咋市を中心に数多く伝わっています。

本展では「唐人



「色絵山水図平鉢」山崎雲山上絵
能登町歴史民俗資料館蔵

物押絵貼屏風」輪島市蔵)と、雲山が上絵を施したやきもの「色絵山水図平鉢」(能登町歴史民俗資料館蔵)を展示しています。

【絵師⑤】多田宅兵衛(1818～79)

最後に紹介する多田宅兵衛は、幕末から明治時代に活躍した画家。今回の5人の中では一番新しい人物ということになります。

現在の中能登町出身。若年期に諸国を巡り、独学で画技を修得。岸派や四条派風の作品を描いています。また、晩年には歌舞伎座の一員となり、舞台や引幕の絵、チラシなども手掛けました。

本展では、大画面に迫力満点の虎を描いた「虎鷹図衝立」(当館蔵)を展示しています。

【同時開催】(第2展示室)

「つつしとられた風景」

「作家の心をつかんだ眺め」

◆共通観覧料

	個人	団体
一般	350円	280円
大高生	280円	220円

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

「漆芸と陶芸」池田コレクションを中心に」
「石川県の彫刻作家展」そっくりから不思議世界まで」

2月28日(土) ～ 4月12日(日)

◆第1展示室

「漆芸と陶芸」池田コレクションを中心に」

「工芸」は陶芸、漆芸、染織、木工、金工と多岐にわたりますが、本展では当館収蔵品の中核を成す「池田コレクション」を中心に、漆芸(漆工)作品と陶芸作品約25点を展示します。

★「池田コレクション」とは、七尾市出身で岐阜県大垣市を拠点に活躍した経済人・池田文夫氏(1907～87)が、生前に蒐集した美術品で、氏の没後にご遺族より七尾市へ寄贈されました(現在204点)。

◆漆芸◆

縄文の時代から作られてきた漆器類は、丈夫でかつ美しさも伴うことから、日用品として多く生産されてきました。後には美術品としても認められるようになり、優美な装飾を施したのもも制作されるようになりました。

「池田コレクション」

の漆芸作品は、用の美を追求めたシンプルなものから、蒔絵や螺鈿、堆漆などの技法を用いた装飾性豊かな作品まで多種多様です。

その中において、コレクターたちに根強い人気を誇るのが、用の美の代表格「根来」です。中世に繁栄した



「桐唐草蒔絵角盥」「桐唐草蒔絵椀」
(池田コレクション)

紀州根来寺山内で製作され、僧侶たちが日常品や仏具として使用したことが、その名の由来とされます。黒漆に塗り重ねられた朱漆が、長年にわたる使用で摩耗し、ひび割れ、これによって所々に表れた黒漆と朱漆とのコントラストは、なんともいえぬ美しいものです。

◆陶芸◆

陶芸の特徴や魅力は何でしょう。まずは、土に触れることでしょう。冷たい粘土(陶土)も、人が手でこねたり形成したりしていくと、体温を吸収して柔らかく、温かみを帯びていきます。また、そこから更に焼成すると、微妙な温度差や時間差によって、イメージ通りにもなれば、時には思いもよらない新たな魅力が加わります。

「池田コレクション」

のうち、工芸作品は岐阜県美濃地方ゆかりの陶器が中心で、織部・志野・瀬戸黒など、それぞれ違った特徴や深みがあります。

また、それらは実際に茶の湯の席などで使用され、個々の味わいのある表情は人々の心を捉え、長い間愛され続けてきたのです。そんな陶芸作品たちをお楽しみください。



「瀬戸黒茶碗」荒川豊蔵
(池田コレクション)



「織部すすき文徳利」
(池田コレクション)



「根来湯桶」
(池田コレクション)

◆第2展示室

「石川県の彫刻作家展」そっくりから不思議世界まで」

一般的にジャンルとして「彫刻」と呼ばれるものの中には、木や石を彫ったものだけではなく、粘土などを肉付けしたもの、金属の鑄造によるものなども含まれ、実に広範囲にわたっています。

石川県ゆかりの大勢の彫刻作家も、やはり様々な材質や技法で制作しています。また、その作品は、写實的にモチーフの内面まで写し取ったようなものがあれば、現実には存在しないが、まるで実在するかのように表現されたものもあります。

本展では石川県ゆかりの彫刻作家たちが、独自の表現で制作した魅力溢れる作品約25点を紹介します。

日本近代彫刻の大家・平櫛田中(1872～1979)に師事した、田中太郎(1911～92)が表現する写実と不思議世界の両面も見どころです。



「鳥」
田中太郎



「迦陵頻伽」
田中太郎



「緋の舞」
末政哲夫

◇共通観覧料

	一般	個人	団体
大高生	350円	280円	220円
中学生以下無料・団体は20名以上です。	280円	220円	

※中学生以下無料・団体は20名以上です。

イタリア・ボローニャ国際絵本原画展報告

11月7日(金)、七尾市立のとじま保育園の年長さんによる鼓笛隊の演奏で、展覧会は幕を開けました。当館でボローニャ展が始まったのは、1998年。17回目ともなれば、子どもの頃に観たボローニャ展の思い出を話してくださる方々もおいでです。400枚以上の原画が館内いっぱいに表示され、幅広い層の皆さんに絵本の世界を楽しんでいただきました。

関連イベントも、絵本の会もこもこさんによる「かんたん絵本を作ろうよ!」、野間成之さんによる『のまりん』の紙芝居劇場、そして会場をアトホールに移して開催した「おはなし劇場」など、沢山の方にご参加いただきました。

来年はどんな作品に出会えるか、楽しみです。



のとじま保育園年長児による鼓笛隊



それぞれ個性ある絵本です



手遊び歌で「チューリップ」と投げキッス



人形劇「桃太郎」で、皆さん大忙し

第15回 友の会鑑賞の旅 実施報告

10月19日(日)、日の出前の5時30分にバスは京都に向けて出発、金沢から参加の会員も含めて、今回は23名の参加をいただきました。

最初の見学地は「圓徳院」。皆様ご存じ、長谷川等伯筆「山水図襖」の所蔵寺院です。まずは庫裏の座敷に通され、お抹茶をいただきました。瓢箪の形をした小豆の菓子優しい甘さで至極上品でした。

後藤閑栖御住職から、長谷川等伯を絶賛されるお話があり、全員がおもわず自分の事のように喜びました。また、生きる目的などを熱く語っていただき、一同心が揺さぶられ感動しました。ご法話の後、自然と参加者から閑栖御住職に、集合写真に入っていたきたいと声上がり、同室にて記念撮影となりました。その後、数々の宝物や名勝の庭などを拝観しました。

昼食まで少し時間があつたので付近のお土産店などを散策し、昼食処「羽柴」へ。食事は「京ゆば膳」。窓から「八坂の塔」を眺めながら、こだわりの自家製京生ゆばを美味しくいただきました。

次の見学先は、京都国立博物館です。「平成知新館」オープン記念展「京へのいざない」は、国宝・重要文化財等120選の展示とあつて、次から次へと大勢の方々が来館していました。特に、別棟「明治古都館」での「修理完成記念 国宝 鳥獣戯画と高山寺」展は人気が高く、長蛇の列。

さらに、「鳥獣人物戯画 甲巻」を鑑賞するには館内で、もう一度並ばなくてはなりません。行列に並ぶだけで時間がなくなり、何も鑑賞できないという最悪の事態を回避するため、会員の皆様に希望を聞いて次の3班に分かれていただくことになりました。

1班は、「京へのいざない」展のみを観覧する

会員12名。2班は、明治古都館には入館するが「鳥獣人物戯画 甲巻」は観覧しない会員7名。3班は、「鳥獣人物戯画 甲巻」を時間いっぱい並んでも観覧する会員4名。

1班は各々、焼物や仏像など、心ゆくまで興味ある分野の作品を鑑賞していました。長谷川等伯筆「枯木猿猴図」は、狩野永徳筆「花鳥図襖(聚光院方丈障壁画)」と並んで展示されていて、とても興味深いものでした。2班と3班は、明治古都館に入るため60分待ちを覚悟していましたが、結果40分程に短縮できました。その後、2班は本展を鑑賞し、「京へのいざない」展も鑑賞する事ができました。3班は、「鳥獣人物戯画 甲巻」を観るために館内で、さらに45分程並び「甲巻」を鑑賞することができました。

帰路は混雑も無く、七尾へは午後9時頃に無事到着。帰りの車中でアンケートをとらせていただいたところ、後藤閑栖御住職のご法話が、胸に響いたという感想が一番多かったです。

後藤閑栖御住職には、ご多忙中にもかかわらず色々とお取り計らいをいただきました。この場をかりてお礼申し上げます。

京都国立博物館では、全員が同じ行動を取れませんでした。各々、好きな作品と対峙し、ほぼ目的を達する事ができ安堵しました。

最後になりましたが、参加会員の皆様には、ご理解ご協力をいただき、無事に旅行を終えることができました。本当にありがとうございました。



圓徳院にて

ボランティア研修旅行



当館の監視をお願いしているボランティアスタッフを対象に毎年研修旅行を実施しています。今回は9月30日(火)に、ボランティアさん19名と職員3名で富山へ行ってきました。

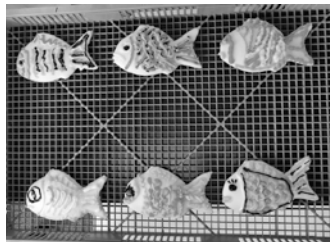
最初に、富山県水墨美術館へ。平屋の広々とした空間の建物で、青々とした芝生が広がる庭園があり、とても素敵でした。館内に入り学芸課長の中川美彩緒さんの解説で「円山応挙と四条派」展を鑑賞。平日にも拘らず、たくさんの人が訪れていました。

昼食後、梅かまミュージアムで工場見学及びかまぼこ作りを体験しました。かまぼこアートに挑戦です！鯛の形をした無地のかまぼこ色とりどりの絞り出し袋が用意され、皆さん思い思いに表現していました。蒸しあがるまでの時間、工場内を見学。細工かまぼこの実演を見せていただきました。工場見学後は、かまぼこの試食&お買い物タイム♪

今年は天候にも恵まれ、ご参加いただいた皆さんのご協力のもと、楽しい旅行になりました。ボランティアさん、ありがとうございました！これからもよろしくお願いします！



皆さん真剣です



完成！！どれも力作です



富山県水墨美術館にて集合写真

貸館催し物案内

アートホール催し物案内

お別れ発表会

2月21日(土) 開演 午前9時00分

クリスマスに続いて2回目の発表会を行います。楽しい劇や、可愛い遊戯など、さらに成長した姿が見られると思います。年長児が最後の発表となることもあり是非、皆さんで見に来てくださいね！

主催 社会福祉法人小丸山保育園

連絡先 島崎 ☎0767(53) 3700

難攻不落の七尾城とその時代背景

2月24日(火) 開演 午後1時30分

難攻不落の七尾城を上杉謙信の視点から捉えると共に、七尾城築城と等伯が生きた安土桃山の時代背景を探る。

『講演会』上杉謙信から見た七尾城と能登畠山氏『フォーラム』テーマ・難攻不落の七尾城

主催 七尾の里山里海文芸紀行実行委員会
連絡先 七尾市観光交流課内 ☎0767(53) 8436

お楽しみ発表会

3月14日(土) 開演 午前9時30分

春から練習してきた詩吟や手話、日頃遊びの中に取り入れているけん玉やフラフープ、竹馬などを発表します。子どもたちは保護者の方々に披露するのを楽しみにしています。皆様のお越しをお待ちしております。

主催 小丸山放課後児童クラブ
連絡先 大場 ☎0767(52) 3710

等伯コーナー

長谷川等伯展特別講演会報告

「長谷川等伯とその多彩な画業」

講師 黒田泰三氏(出光美術館学芸部長)

私は1986年に光信という狩野永徳の長男の作品に出会い、光信のことを調べ始めました。すると、どうしても狩野派ではない1人の画家に行き着いた。それが長谷川等伯でした。今回は等伯研究の足跡を踏まえ、多彩な画業を振り返りながら、特に「狩野派から見た等伯」というテーマを中心にお話ししたいと思います。

『等伯の芸術生活』

◆牧谿画が等伯に与えた影響

等伯が大きく進歩を遂げた一つの理由は、中国の牧谿という画家が描いた、大徳寺の「観音猿鶴図」です。等伯は、この絵を見ないと描けない絵を描いています。出光美術館の「竹鶴図屏風」の鶴は、全く同じポーズです。画家が絵を見たということは、模写をしたということだと思っています。つまり、この牧谿の動物表現を見て、等伯は動物の情愛表現を思いつく訳です。等伯の猿は、親が子どもをしっかりと抱きしめて、子どもを守っている姿です。鶴の方は、生き別れた子どもを探してさまよう親の姿と解釈されることが多いようです。一方、牧谿の方は、自然を深く考察するというテーマが背景にあるといわれます。ですから、猿も鶴も哲学的な命題を説くための一つの要素といえます。等伯はあくまで肌の温もり、情を訴える解釈に代えて描き、その結果得られたのが動物の情愛表現。それがやがて、極めて情感的な絵である「松林図屏風」誕生へと繋がっていったと考えます。ですから私は、牧谿のこの絵を見なかったら、「松林図屏風」は生まれてこなかったかもしれないと思う訳です。しかし、等伯が等伯であるのは、牧谿と同じようなテーマで描かなかったということです。それがその後の表現の可能性をもたらしていったと考えています。

◆等伯独自の情愛表現

出光美術館の「竹虎図屏風」は、故山根有三先生が、雄が雌にちよつかいを出そうとしているけれど、雌は無視をして焦らしているんだとおっしゃって、やはり情愛を感じる表現かと思います。一般的に、虎は獠猛なイメージで見ますから、当時狩野派もみんな恐ろしい形相で描いた。そんな時代にこんな虎を描く訳ですから、やはり等伯の発想は非常にユニークであるし、それを形にする力があつたということは、特筆すべきことだと思います。

また、鴉は忌み嫌われる鳥なので、他の水墨画家たちは、叭々鳥という中国にしかない黒い鳥を、中国で描かれた絵を真似して描いた。しかし、出光美術館の「松に鴉・柳に白鷺図屏風」では、等伯は日本で黒い鳥には鴉がいるといつて、ちゃんと鴉を描いて見せる訳です。そして彼一流の、情愛という解釈を加えて描いた。どう見ても、鴉は一家団圓の姿、白鷺はカップルの姿に見えます。

◆智積院障壁画にみる等伯独自の表現

智積院の障壁画で、私が一番等伯らしいと思うのは「松に黄蜀葵図」です。というのは、狩野派は見栄えよく枝振りを整えたり、花をちよっと落して加工するんです。ところが等伯は、なるべくそのまま画面に再現しています。「松に立葵図」の立ち葵は、全部松の木の向こう側にきれいに並んでいます。一方、「松に黄蜀葵図」は整列せずにばらばらで、これこそは自然界の姿だと思います。恐らく「松に立葵図」は、等伯の弟子の作品だと思います。

◆等伯の戦略・自雪舟五代

等伯は50歳代後半から60代に向い、画壇の中で着実に地位を固めていきます。60代になって、祥雲寺障壁画(現智積院障壁画)を等伯に描かせた豊臣秀吉が亡くなり、等伯は新たな後ろ盾を見つけなければいけなくなりました。そこで、彼はいくつかの戦略を立てたんじゃないかと思っています。

例えば、「松林図」は墨をぼかして曖昧模糊に面として使う牧谿様、秀吉が亡くなった後に描いた隣華院の「山水図」襖は、線を多用してクリアな視界が広がる夏珪様というように、それぞれ中国の絵描きさんの描き方に基

づいて描くんです。また、秀吉の没後は雪舟より五代を名乗り、実際に雪舟が大変上手く描いた、中国の梁楷様の描き方で描いてみせます。雪舟的な雰囲気絵が変わったことは一目瞭然です。等伯は秀吉没後に雪舟というブランドを使い、生き残りを図ろうとし、これが認められ、いくつもの大仕事が無駄に終わらなくなった。彼の戦略が当たったといっていると思います。

◆等伯の戦略・人気画題の大量制作

もう一つの戦略が、香雪美術館の「柳橋水車図」で、沢山残っている「柳橋水車図」に、狩野派が描いたと思われるものは一つもない。みんな長谷川派のものばかりです。どういふことかというところ、「柳橋水車図屏風」を等伯が描いて、それを弟子たちに模写させていったと思います。沢山作ってヒット商品として流通させ、それが京都の町で大変人気を呼んだんじゃないかと思っています。禅林寺の「波濤図」も類作が3点ありますので、同じく大量制作を試みたと思います。

画法的には、60代を過ぎていくと少しずつ線が荒々しくなつて、極めて筆数の少ない絵になっていきます。でも、形体を捉える力や感覚は上手いんです。決して手を抜いているのではなく、減筆体の一つの試みだと思います。そして60代後半になると、法眼落款と我々が呼んでいる、「自雪舟五代長谷川法眼等伯筆」というサインをした作品が沢山確認されます。

《狩野派から見た等伯》

◆等伯と永徳

1590年の8月8日から同13日までの公家の日記に、永徳が光信、弟の宗秀を連れてきて、「内裏の御造営で対屋の襖絵を長谷川というものに描かせることにしたと聞いたが、それが非常に迷惑なので、止めさせてほしい」と申し出て来た。等伯が政治力を使つたにせよ、永徳に正面から立ち向かつていったという、重大な事件です。13日の日記には、それを前田玄以に申し入れ、取り消すことに成功し、永徳親子が御礼にやってきた。これは日本の美術史では大変珍しい出来事で、これが永徳と等伯がライバル関係といわれる一つの根拠です。

我々の先輩たちはこの一件について、等伯は永徳に引けをとらない、自分の芸術に対する自負というものがあった。だから永徳側にしても、等伯の芸術性を認めざるを得なかったと、この資料を読まれてきました。ただ、私はそれだけではなくて、調べてみたら対屋に描かれるべき襖絵は着色画なんです。ですから、着色画の領域で等伯は、永徳と同等以上の表現力を持っていたと自他共に認めていたから、こういう行動に出たと読むべきです。この出来事は、等伯が非常に優れた着色画家でもあつたということを証明しています。智積院以外にも着色画の作品はあるべきだという私の推察も、その後「柳橋水車図」や相國寺の「萩芒図」が認められたことによつても、物語っていると思っています。

次に、智積院の楓の巨木表現は、「檜図屏風」などの永徳様式と呼ばれる樹木表現の影響を受けて出来たと思います。ただ、私は根元の秋草は、等伯らしさを伝えていると考えます。永徳にはそんな秋草表現はありません。狩野派も、等伯が自分たちにはない草花表現や動物の情愛表現をやっていることは、恐らく気付いていたけれど、それがいきなり永徳の目の前に登場してきた訳です。それから慌てたと思います。で、結局等伯を排斥していく。それがその後、探幽に受け継がれ、表だつたかたちで等伯排斥につながつたのだと考えています。

「楓図」では、池と思われるところに、紅葉がかった楓の葉っぱが絶妙に重なつていて、一番美しいところですね。ところが永徳の場合は、ひたすら豪快な表現に終始している。結論としては、永徳の時代に等伯は、自分たちにはできない草花表現をやつたというふうにみていたと思います。

◆等伯と光信

永徳が亡くなり、次のリーダーは狩野光信です。結論からいいますと、光信は等伯の影響を受けたと思います。光信の一番の美的特質は、抒情性の表現にあります。つまり、画家のプライベートな心情や、揺れ動く感情というものを表現する。日本の画家がそういう絵を描くのは、江戸時代になってからですが、等伯はその遥か前から動物を描いたり、草花を描いて抒情表現をやっているんで

す。永徳も甥っ子の探幽も、どちらかというと構築的で、極めて完成度の高い画面構成が多いので、冷たいクールな感じがしますが、光信は違います。

では、具体的に何が等伯の影響を受けた光信の芸術かというところ、空気感の表現だと思っています。例えば「松林図屏風」は、松林に立ち込めた霧とも霧ともつかない空気が表現され、圧倒的に余白の方が広い。そういう空気感の表現が、実は光信の勸学院の襖絵にもあります。「松林図」は紙に墨。こちら金地に絵の具ですから、出来栄は随分違って見えますが、注目したいのは雲です。光信独特の雲というのがあり、どの場面をとっても流れてきてピタッと終わる、完結するんです。これに対して永徳の金の雲は、画面の右から左まで途切れることなく続き、強い風として描いています。探幽もこういう雲の表現じゃないですから、光信の独特の空気感の表現といわざるを得ない。空気感の表現というのは、技術的にかなり難しいと思いますが、そこを光信は非常に上手くやっています。私はそのヒントは等伯の絵にあつたんじゃないかと思うんです。

例えば1593年に秀吉が九州の名護屋（現 佐賀県）にお城を建てます。お城の中の障壁画制作には、永徳は亡くなっていますから、光信を呼ぶ訳です。その時光信は、長谷川平藏という画家を呼んでいます。本来は長谷川派のリーダーである等伯が行くはずですが、この特別の仕事で動けないんですね。恐らく平藏は、等伯が認めた実力のある画家だと思っています。光信はこの時、等伯と一緒にやろうと声をかけているんですよ。

さらに、狩野派と長谷川等岳が合作した屏風が、東京国立博物館にあります。この元和年間に、光信はすでに亡くなっていますが、探幽はまだ若く、まだまだ光信の影響が残っていた時代の出来事です。

また、光信が描いた屏風に、長谷川派が得意としたモチーフが出てきます。一つは動物の情愛表現。もう一つは、胡粉を盛り上げて柴垣を描き、その上に金箔をのせたモチーフです。狩野派では山楽・山雪が描いたのが一番早く、それよりも前の時代に、長谷川派は胡粉を盛り上げて柴垣を描いています。ですからこれも、光信が長

谷川派のことを認めていたことになります。

さらに、狩野内膳は「豊国祭礼図屏風」の中に、等伯とその一派が大量制作を試みた「柳橋水車図」を描いています。これらが集中するのは、やはり光信の時代です。光信の時代、狩野派は間違いなく等伯と上手くいっていったんですよ。もっといえば、光信は従来の狩野派に無い、「松林図屏風」のような空気感による抒情性表現に惹かれ、影響を受けたんじゃないかと思っています。

◆等伯と探幽

問題の探幽と等伯の関係です。狩野派が編纂した『本朝画史』に、等伯の項目があります。読んでいくと、等伯を認めているけども、まるで重箱の隅を突くようないい方をしている。例えば等伯は、狩野派が画壇の長であつたことを妬むとか、千利休と共に狩野派のことを批判したとか。

さらに虎の絵には、探幽が「竹虎の絵、屏風一双、周文の真筆である」と書き込みをしている。周文は雪舟の先生です。問題は、探幽が周文の真筆と認めている点です。今、等伯の研究者は皆、様式的にも技法的にも等伯の作品だと思っています。それを何故、探幽が周文の作品としたのか。等伯が亡くなって30〜40年後くらいが探幽の全盛期ですから、当然等伯の絵を見ているはずですよ。何しろ探幽は、古今東西の古い絵を見て全部模写するんです。それが「探幽縮図」といって、現在も残っています。そんな探幽が、見間違はずはありませぬ。意図的

としか思えない。結論をいうと、等伯の作品を認めたくない、世の中から消滅させたかった。つまり永徳から探幽に至る時代の中で、狩野派に立ち向かったのは等伯だけです。それは永徳にとつて甚だ不快なことだったので、取り消したかった。にもかかわらず、光信の時代には等伯を認めてしまった。それが恐らく、許したいことだつたんだと思います。これを裏付けるように、光信の芸術を否定するコメントが、探幽の時代に集中して出てきます。そのレットテルは、長く光信芸術を封印していた訳です。何れにせよ、探幽がこの書き込みをしなかったら、永遠に探幽と等伯の関係は、表に出ることはなかったのですが、探幽の姑息な動きが、逆に等伯の存在感を

強めることになったと思います。

◆長谷川派と狩野派

「松林図屏風」を描いた等伯は、「柳橋水車図」のような絵は描かないという先入観があつたと思いますが、長谷川派は似たような「柳橋水車屏風」を大量制作し、狩野内膳は「豊国祭礼図」の屏風の中に、狩野派が絶対描かなかつた「柳橋水車図」を、2箇所も描いています。それ程長谷川派の「柳橋水車図」が、当時大人気であつたということです。ある時期長谷川派は、間違いなく狩野派を凌駕する勢いだったのです。

我々の先輩の、1600年代初期の日本の絵の歴史観は、ピラミッドの頂点に狩野派がいます。常に新しい画題を考えては絵にし、リードしていく。例えば「洛中洛外図屏風」や「南蛮屏風」「祇園祭礼図屏風」なども、狩野派が考えたといわれています。それがピラミッドの下の方の、狩野派以外の流派や町絵師などに影響を与え、真似されていくという構造です。ところが「柳橋水車図」は、長谷川派が考えたものを狩野派が真似して描いたのです。ですから永徳が亡くなった後、等伯が亡くなった後も、実は長谷川派の存在感は、かなり強くあつたと考えなければいけない訳です。

◆長谷川派の風俗画

風俗画の領域では、それがはつきり出てきます。長谷川派が考えた風俗画のテーマが出来上がり、それがやがて狩野派に影響を与えていくという、全く従来の歴史感とは逆の現象が起きてくるんです。具体的にいうと、徳川美術館の「相応寺屏風」、彦根城博物館の「彦根屏風」は、何れも狩野派の代表的な風俗画です。これらを調べれば調べるほど、元々長谷川派が考えていた風俗画があつて、その影響を受けて出来たということが分かってくるんです。じゃあ、誰が描きはじめたかといえば、やっぱり等伯だと思えます。従来の歴史感を払拭するには、等伯の風俗画をまず探すが、私の直近の課題です。

結論としては、等伯の画業は非常に多彩で、それは狩野派も無視できない程の芸術性と存在感をもっていて、流派の力になつていったということです。

ご清聴ありがとうございました。

※本文は平成26年4月29日に開催した特別講演会の内容を、当館がまとめたものです



これからの展覧会予定



平成27年4月18日（土）～5月10日（日）【会期中無休】

◆第1・2・3展示室 開館20周年・北陸新幹線金沢開業・能越自動車道七尾氷見道路開通記念特別展 「長谷川等伯展 ～日本障壁画の最高傑作『楓図』公開～」

桃山黄金文化を象徴する屈指の名作。「松林図屏風」と並ぶ長谷川等伯国宝作品の双璧。京都・智積院が所蔵する至宝「楓図壁貼付」が、当館開館20周年記念として特別公開されます。さらに重要文化財5件を含む名品26点もあわせて展示予定。等伯栄光の軌跡を伝える至高の品々をぜひご鑑賞ください。



国宝「楓図壁貼付」長谷川等伯
京都市・智積院蔵

平成27年度 石川県七尾美術館友の会会員募集のご案内

新年度友の会会員を次の要領で募集いたします。現在会員の方で更新をご希望される方は改めてお申込みください。お申込みのない場合はそのまま退会となってしまいますのでご注意ください。

- ★入会手続き★ ①受付開始 3月1日(日)から【年度会費1,000円】
②受付場所 当館受付カウンターまたは郵便受付（郵便振替用紙をご利用ください）

※郵便局備え付けの振替用紙の通信欄に必要事項《会員の区別(更新・新規・元会員)・郵便番号・住所・電話番号・氏名・生年月日》をご記入のうえ、会費を添えて最寄りの郵便局窓口へお出しください。
払込手数料は恐縮ですがご負担ください。会員証のお渡しには会費払込後10日ほどかかります。

郵便振替口座番号 00710-0-50795
加入者名 石川県七尾美術館 友の会



平成27年度
石川県七尾美術館
友の会会員証

★友の会特典★

- その1 当館主催展覧会の観覧料が割引になります。
- その2 情報満載「美術館だより」をお送りします。（年度内4回発行）
- その3 相互割引提携館主催の展覧会観覧料が割引になります。（会員本人のみ）
- その4 特別企画展開会式・内覧会にご招待します。（無料）
- その5 販売グッズが割引になります。（一部除く）
- その6 喫茶室利用代金が10%割引になります。（10円未満切捨）

「黄瀬戸六角盃」（池田コレクション）

※左記のほかにも友の会会員限定の催し、特典がございます。4月からご活用くださいますよう、お早めのご入会をお待ちいたしております。

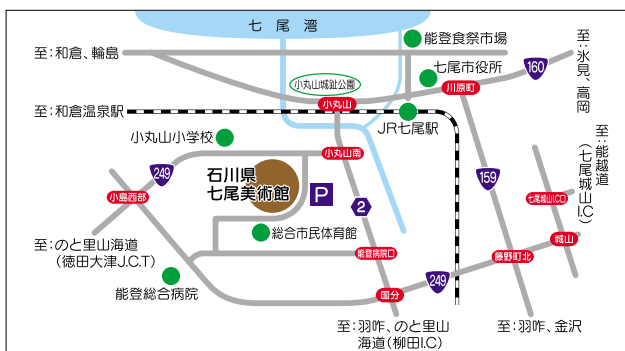


割引、プレゼントなど特典いろいろ！
ぜひ当館でもご利用ください。

無線でネット



エントランスホール及びティールームにて、Wi-Fiスポットサービスの「FREESPOT」をご利用頂けます。



飛行機……羽田空港から能登空港まで約1時間、能登空港から「のと里山海道」(能越自動車道)利用約45分
車……「のと里山海道」徳田大津J.C.T.又は「能越自動車道」七尾城山J.C.より約15分
タクシー……JR七尾駅から約5分
徒歩……JR七尾駅から約20分
市内循環バスまりん号(1時間に2便 約10～15分)
……JR七尾駅前「ミナ・クル」ビル裏バス停から等伯ルート(西回り)「七尾美術館前」下車
なおおコミュニティバスぐるっと7(1日4便 約10分)
……JR七尾駅5番乗り場から西コース「小丸山台1丁目」下車

◎次号・第81号（春号）は4月1日発行予定です。

日	月	火	水	木	金	土	2015
					1	2	1
4	5	6	7	8	9	10	
11	12	13	14	15	16	17	
18	19	20	21	22	23	24	
25	26	27	28	29	30	31	JANUARY
日	月	火	水	木	金	土	2015
1	2	3	4	5	6	7	2
8	9	10	11	12	13	14	
15	16	17	18	19	20	21	
22	23	24	25	26	27	28	FEBRUARY
日	月	火	水	木	金	土	2015
1	2	3	4	5	6	7	3
8	9	10	11	12	13	14	
15	16	17	18	19	20	21	
22	23	24	25	26	27	28	MARCH
29	30	31					

◆1月～3月カレンダー◆
開館時間 ◆午前9時～午後5時 ◆は休館日
(入館は午後4時30分まで)